岩手医科大学歯学会第45回例会抄録

日時：平成10年2月28日（土）　午後1時
会場：岩手医科大学歯学部第4講義室（C棟6F）

演題1．解剖実習遺体に見出された二分肋骨の三例

○大澤　得二，佐々木利明，塚本　暁子*
小野寺政雄，奈良　栄介，陳　　榮光
藤村　　朗，野坂洋一郎

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座，小児歯科学講座*

平成9年度の岩手医科大学歯学部二年生の解剖学実習遺体の中に二体3例の二分肋骨を見出した。二体の遺体には肋骨以外の形態的な異状は見出されなかった。なお，二体とも既往歴は精神分裂病以外に特記すべきものはなく，直接死因は急性肺炎であった。その内，一体に見られたものは右第三肋骨における二分肋骨であり，遠位側において二分した後，それぞれの分枝が肋軟骨を持ち，再び癒合して胸骨に関節していた。他の一体は右第三肋骨と左第四肋骨の二分肋骨を併せ持っていた。右第三肋骨の形態は一体目と同じであったが左第四肋骨は二分してそれぞれの分枝が肋軟骨を持った後，下位の分枝だけが胸骨と関節していた。

以上のどの例においても二分肋骨間は正常と思われる肋間筋で満たされていた。肋間神経は下位の分枝の下縁を走行し，上位の分枝には分布していなかった。また，内胸動脈からの肋上枝が上位の分枝に向かって走行していた。

二分肋骨の発生率についてはサモア人8.4%，米国人2.2%（Martin et al. 1960）の様に多い報告と，米国人0.013%（Steiner 1943），0.0064%（Etter 1944）という稀な報告があるが，今回の報告は本学歯学部の解剖学実習における初めての遭遇例であることから，少なくとも日本人における発生率としては前者は考えにくく，後者に近いものと推測される。

遺伝子欠如マウス（Hoxc-9：Suemori et al. 1995, MPF 4：Zhang et al. 1995）において肋骨の分岐と癒合が報告されている。サモア人の例の様に少数の特定な集団に二分肋骨が多く出現する場合は遺伝子的要因を考えることができるかも知れない。

二分肋骨は第三，第四肋骨に出現頻度が高いことが報告されているが（Martin et al. 1960, Schumacher et al. 1992），今回我々が報告した三例も全て第三及び第四肋骨であった。

肋間神経が上位の分枝に伴っていなかった事より，この変異は体節の増加ではなく胸骨との関節部分の変異としてとらえるべきと思われる。

演題2．成人におけるStrip mutans testスコアの変動

○阿部　晶子，稲葉　大輔，米満　正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座

Dentocult "Strip mutans" test (SMT, Orion Diagnostica, Finland) は，高選択性のMSB寒天培地と専用のストリップを利用して唾液中ミュータンス連鎖球菌の菌数を直接評価できる簡便な齲蝕リスク判定試験として広く応用されている。しかしその個人における変動は，十分検討されていない。そこで本研究では，成人30名（平均22.1歳）に対してSMTを週1回，連続的に行ない，その週間変動を，またその内の10名（平均22.0歳）に対しては，日間，日内変動を評価した。SMTは通法によりサンプリングを行ない，37℃，48時間培養し，その評価は前回本学会で報告したコロニー画像定量法（ADS）を用いた。また，SMTと同時に行った，RDテスト，カリオスタットとの対応，採取した唾液のMSB寒天培地上のコロニー数（CFU/ml）との対応，口腔診査の結果との対応についてそれぞれ検討を行った。その結果，SMTストリップ上に形成されたコロニー数（ADS値，CFU/Strip）の変動は，週間，日間，日内のすべてで認められた。その変動には特徴がみられ，ADS値が100 CFU/Strip以下で安定している群と変動幅の高低が著しい群がみられた。

ADS値とRDテスト，カリオスタット，齲蝕経験との間には，明瞭な相関関係は認められなかった。また，ADS値とMSB寒天培地上のコロニー数との間には，おおむね相関関係が認められた。本研究の結果より，